短編小説

けむり

短編小説

けむり

松田良夫

著者略歴

大正8年3月生，昭和9年農学校卒業後，検事局雇員，戦中2度ばかり応召，帰還後は巡査として就職するも，終戦後帰農して，昭和30年より文芸誌を創刊。昭和50年3月，妻死亡して独居生活に入ってからは文筆に専念。

短編小説　けむり

定価　二、〇〇〇円

昭和六十二年二月一日　発行

著者――松田良夫

発行所――つむぎ社

富山県魚津市江口紬町四一―三
電話　〇七六五―二二―四三二五　郵便番号九三七

製作――株式会社講談社出版サービスセンター
東京都文京区音羽一―二―一一　第二音羽ビル
電話　〇三(九四一)五五七二　郵便番号一一二

印刷――信毎書籍印刷株式会社

製本――大製株式会社

©Yoshio Matsuda, 1987 Printed in Japan

ISBN4―87601―120―6

根生いの庶民文学

佐伯彰一

松田良夫さんは、根っからの文学好きという他ない。『つむぎ』という個人文芸誌を二十数年も出しつづけてこられて、その総目録を送ってもらったことがあった。文芸同人誌というのは、私も戦前の学生時代から関係して、戦後には中心のエディター役を数年間つづけた経験もあるが、経費のやりくりから編集、校正の実務に至るまで、並大抵の苦労ではない。もう一度やれといわれても、まっぴら御免というのが本音で、そういう苦労をこつこつと二十数年間も続けてこられたというだけで脱帽せざるを得ない。

いま、『つむぎ』の総目次を開いてみると、松田さんご自身の執筆は当然として、伊藤永之介、岩倉政治、外村繁といった珍しい顔ぶれから、歴史家としての高名な高瀬重雄、梅原隆章、翁久允、ゆかりの久美さん、それに魚津市長などまことに多士済々の執筆陣であり、編集

者としての松田さんのご苦労と手腕に改めて感心するのである。

さて、松田さんが今度『短編小説集　けむり』を刊行されるについて「序文」を求められた。これ迄、雑誌以外にも、親鸞関係の労作を何冊もいただいたことがあり、『関東常陸に恵信尼をたずねて』（昭和六十年刊）は、松田さんが愛車を駆使して、くまなく恵信尼ゆかりの土地を巡遊してゆく間に、親鸞、恵信尼の風貌と信仰生活が鮮やかに浮んできて、おのずと書き手の熱意が伝わってくる。楽しく読めて、重い読みごたえがあった。

松田さんとは、じつは文通だけで、まだ面識はないのだが、私と同県人というばかりか、ほぼ同じ世代の方である。戦時中応召、出征の体験もおありで、戦中から戦後にかけて日本人の大方がなめざるを得なかった苦労のあとが、作品のはしばしにも滲んでいる所につよい共感を味わった。短編の結構としては、もう一歩の彫琢を、また凝集力をといいたい所もないではないけれど、何よりも素直にのびのびと書かれて、情感がおのずと伝わってくる所がいい。いかにも根生いの庶民文学という感じである。

作品の「耕造と与作」には、敗戦後の日本の農家の不安、動揺がおのずと流露しているし、「もみじ」では、子供のいない中年夫婦が、妻君のずっと年下の末妹をひそかに養女と考えながら、言い出しかねている心迷いが素直に伝わってくる。小説としては、もう一歩ふみこんでという気がしないではないけれど、無技巧のふんわりした味わいが捨てがたい。タイトル・ス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

トーリーの「けむり」は、戦争中に軍隊で知り合った旧友の死にまつわる回想物語であるが、語り手と相手との性格、職業、等に体験の違いなどが、おのずと浮び上ってきて、カムチャッカまで出漁したこともある漁夫で、「すでに支那大陸の戦場を二度にわたってきて踏み荒してきている猛者」という友人の、戦後のあっけないような弱り方と急死が、読者の心に泌みわたらずにいない。この友人の、素朴でむき出しの戦争論も印象にのこる。松田さんらしい無技巧の持ち味が、よく生かされた秀作といえるだろう。

そのほか、一々の作品にはもうふれないが、松田さん年来の親鸞、恵信尼への執心を示した回想体のもの、また郷土にゆかりの深い歴史物「落城譜」「魚津の義人」なども収められていて、年来の松田さんの根気よく粘り強い文学執心ぶり、また人間関心の幅と広がりをうかがうことが出来る。

松田さん、長年の間、ご苦労さま。一層のご自愛とご研鑽のほどをと申し上げたい。

一九八六年　晩秋のくまなく晴れた日に

（文芸評論家）

短編小説集　けむり――目次

根生いの庶民文学　佐伯　彰一　1

ぜいきん　11

耕造と与作　20

静即真　35

荷車仲仕　49

孤独の交信　65

病室　96

もみじ　112

けむり　124

お婆ば　141

偶然のエンゼル　161
同席した女　185
幸福とは　217
栃津の秋　225
落城譜　242
安田村の道三　259
魚津の義人　281
あとがき　302

装幀　東一雄（亜細亜美術協会理事　審査員）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

短編小説集

けむり

ぜいきん

孝平はなんだかせわしかった。じっとして畑の草をむしっている程の心の落ち着きを失ってしまって、なにかしらそわそわとしていた。誰か相手をみつけて、自分の憤懣をぶちまけてやりたい衝動にかられて仕方がなかったのである。彼はじゃがいもの除草をしてこやしをやり、それから土寄せをする積りでいた。が、どうしても腹が立ってならないので、くわをおっぽり出して自分の畑から出ていった。彼の畑から指呼の間に村の共同作業場があって、そこには先刻から人が寄って、何か声高にしゃべっていたが、時々おかしそうに笑う声が、畑にいる孝平の耳にとどくので、それが彼の憤懣を倍加さしたのであった。

そこにはゆるい紫煙がフラフラ大空へ昇っていた。それもせっかちの孝平の眼には、小面憎いほど幸福そうに映ったのであった。とうとう彼は誘われるようにそちらの方へ足を向けた。

いつもやかましい作業場は、モーターの故障でひっそりかんとしていた。五月の陽射しが、遠慮なしにぬくぬくと作業場の中まで入っていた。

四五人の人溜りの中から、孝平をみつけた一人の男が声をかけた。

「やあ孝平どん、いろう暖かい日だのう」

「おう、どうしたい」

ブツリとそう言って声の主をみた。茂作だった。

「うん、モーターのなんかがいたんだちゅんで、よわったもんじゃ」

「ホウ、そいちゃ生憎様じゃったなァ、お前なんかしにきとったんかい」

「うん、藁を一寸打つたいと思ってなァ」

「ふん、今時なんの藁じゃい」

「うん、馬のガキゃすき手縄を切ったもんで一本なわにゃならんのだ」

「フフ、泥棒みてから縄かい」

「ハッハ、まあいじめなさんな」

二人は哄笑した。が、孝平は、そんな会話位で心の休まろう筈もなかった。彼は、昨日税務署でとられた税金のことから、大きなショックを受けているのだった。

「なあ茂作どん、そりゃそうとお前サ、例の税金どうしているんだ」

「うん、ありゃまだ持ってかねえ」
茂作はケロリンとそう言った。孝平はあきれた顔で、
「ホウ、まだか、それでもお前サ五月からになると、二割五分もの利息をとるちゅうじゃねえか……」
「なあに、そんなことを言ったってお前サ本税さえかけられねえちゅのに、利息まで支払えるかよ」
「そんな無茶いうたって相手や承知せんまいがに」
「承知せんにゃそれまでよ、何んとでも勝手にしくさりゃいいじゃねえか……」
茂作は平気な風でそう言った。
「そんな度胸でおれりゃいいなあ、まさか殺すもせんまいからのう」
「そうよ、お前サ一寸考えてみい、年が年中汗水垂らして稼えでよ、ろくなまんまも喰ってかれねえおれ達がよ、安い米を売らされて、その上税金をかけろじゃお前サ、一体政治ちゅうもんが誰のためにあるんだい。なあ孝平どん、おら達や婆婆へ税金を納めに生まれてきたわけじゃねえんだぜ、勝手に戦争をしくさって、そして敗けて、おら達ばっかりに米を出せ、税金納めろじゃ、お前、何ちゅうこったよ、あんまりのさばらすと駄目だぞあいつら」
茂作は、勢いよくまくし立てた。孝平は、茂作の毒舌に魅了されそうだった。が、彼はやは

り、そんな意味からしても昨日の納税は早まった処置のようにも思われた。
が、やはり彼は、おれは日本人だと意識せねばならなかった。彼は、昨日言った若い税吏の文句を思い浮べるのであった。
「それもそうじゃがのう。しかし茂作どんお前サ一人そんなこというとったって承知せんまい。おらァもな、昨日税務署へ行ってきたんじゃ。なんしろお前、この前の時一万一千円もとられてよ、こんど又六千円もとられるちゅんじゃ。なんぼおらだってたまったもんじゃねえばい。この調子で金ばっかりとられたんじゃ、ものの二三回でおれの身上御破算だばいの。こりゃああかんと思ってなァ、税務署の役人に文句言おうと思って出かけたんじゃ、するとお前、ひげの生えた奴等かと思いのほか、生白いぼんちの野郎が出てくさってのう…」
彼は、一寸一息入れた。そしてさっきから煙管につめた火のつかないのぞみにいらだっていた。性来もさっとした孝平だったのに、近頃は事毎にかんしゃくが募った。
茂作は、この孝平を面白そうに見ているのだった。日は暑かった。夏を呼ぶ空がまぶしく、ふえた水田にキラキラと反射していた。
作業場の中では、モーターを外しにかかっていた。甚平たちが、町の修理屋へ運んで行くことに話が一決したらしかった。
「おう茂作どんに孝平どん、おら共三人して町まで行ってくるさかいでのう、二時間ばかしじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.